

2017年(平成29年)

2月24日

金曜日



往診望む人に出前しよう

1990年の夏、車いすの障害者が相談にきた。グループで海外旅行をしたいが、旅行会社が「けが人でもでたら責任をとれない」と、医師の同行を条件にしているという。彼らの願いに応え、翌年6月に北米旅行にかけた。これが、僕の人生を

とちぎの風

人生支える在宅医療

太田秀樹 ⑦



おおた・ひでき 1953年、奈良市生まれ。自治医大大学院修了。92年「おやま城北クリニック」開業。現在は医療法人アスムス理事長として在宅医療を推進。

まで暮らす手伝いもできるはずだ。日ごろ日本の医療の姿に漠然とした疑問を抱いていたこともあって、旅行から帰ると、深く大病院に辞表を出した。92年4月、町医者となった。訪問看護を基軸にすえ、在宅医療を旗印に、休日でも夜間でも対応できる独自のシステムを構築した。医師の仲間たちからは「普通じゃない」と嘲笑の的だった。しかし、父だけは「これだけ医者が増えりゃ、変わった医者が1人や2人おっても」と理解を示してくれた。大病院の専門医人気時代に完全に逆行していた。(次回3月3日)

変える衝撃的な体験となった。彼らとは非日常を共有する旅の仲間でもあり、単なる医師、患者の関係ではない。夜な夜な一杯くみかわしているうちに、「医者は都合のよい患者の都合の良い病気しか診ない」と専門領域以外を診ない専門医への痛

烈な批判が聞こえてきた。体調が悪い時は、救急車を呼ぶか、薬局の薬で様子を見るか、選択肢は二つという。本当に医療が必要なときに医療がないのである。病気になる通院できなくなる高齢者と状況が似ている。これから日本は世界一の長寿社会を迎える。往診を望んでいる人たちは必ずいるはずだ。よし、医療の出前をしよう。そうすれば、住み慣れた自宅で最期

まで暮らす手伝いもできるはずだ。日ごろ日本の医療の姿に漠然とした疑問を抱いていたこともあって、旅行から帰ると、深く大病院に辞表を出した。92年4月、町医者となった。訪問看護を基軸にすえ、在宅医療を旗印に、休日でも夜間でも対応できる独自のシステムを構築した。医師の仲間たちからは「普通じゃない」と嘲笑の的だった。しかし、父だけは「これだけ医者が増えりゃ、変わった医者が1人や2人おっても」と理解を示してくれた。大病院の専門医人気時代に完全に逆行していた。(次回3月3日)